通巻147号

山 王

午歳新春号

新春を迎えて

日枝神社氏子崇敬会会長　小池　百合子

令和八年の新春を迎え、謹んでお慶び申し上げますとともに、日枝大神様の御加護のもと、皆様にとりまして希望と実りの多い一年となりますよう、心より祈念申し上げます。

昨年は、山王祭をはじめとする諸行事が滞りなく斎行され、氏子崇敬者各位のご協力のもと、多くの賑わいと感動をいただきました。江戸の総鎮守たる日枝神社の御祭りが、世代を越えて継承され、都心の只中にあって人々の心の拠り所として息づいていることを、改めて実感いたしました。

世界が激動する中、「東京が世界をリードし、新たな価値を創造していく都市であること」を一層鮮明にしてまいります。とりわけ、少子化・人口減少という国難に立ち向かうため、子ども政策を都政の最重要課題の一つと位置付け、「チルドレンファースト」の理念のもと全ての子どもたちに寄り添う施策を進めています。子どもたちが安心して成長できる環境を保証し、その家庭や地域を都が強力に支える取り組みを加速させ、結婚や出産、子育てという人生のライフステージを切れ目なくサポートし、保育・教育・福祉を包括的に整備していく所存です。その成果もすでに現れています。七年一月から六月までの上半期で、都内の出生数は＋０．３％。十年ぶりにプラスに転じております。都民の皆様が将来に希望を抱ける社会、それが私たちの目指す東京です。

また、長引く物価高騰や社会情勢の変化を踏まえ、都民生活の安心と安全を守ることも喫緊の課題です。生活支援とともに、防災・減災の強化、医療・福祉の連携を深化し、災害や感染症など如何なる危機にも揺らぐことのない都市づくりを進めております。東京が全国を牽引する立場として、安定した暮らしを支えることは、都政のみならず国家社会全体の基盤を支えることにほかなりません。

さらに、環境・エネルギー分野における脱炭素化を加速させております。都市としての成長と地球規模の課題の解決を両立させ、次の世代へより良い形で東京を引き継ぐ責任を果たしてまいります。同時に、デジタル化を通じて都政の構造改革も進めてまいります。「シン・トセイＸ」と名付けられた戦略のもと、行政のＤＸを加速させ、都民サービスの品質（ＱＯＳ）を飛躍的に向上させます。窓口手続きの効率化やデジタルワンストップサービス、ＡＩの活用などを通じ、都民の皆様の「手取り時間」の確保を目指しております。

そして、東京の国際競争力を強化するために、スタートアップ支援や創業環境の整備も重点施策です。イノベーションの種を育て、新たなビジネスや雇用を生み出すことで、持続可能で活力ある都市経済を構築いたします。

日枝神社は都心に位置する神社として、多くの人々にとって精神的支柱であり続けております。変化の激しい時代においてこそ、伝統と革新が調和する東京を目指すことが肝要です。政治・行政の立場にある者として、こうした文化的土壌と精神性の重要性を深く認識し、それらを尊重しながら政策を進めることが、持続可能な東京の発展につながるものと確信いたします。

都政は一人ひとりの都民の暮らしと直結しております。氏子崇敬会の皆様、地域の方々とも手を携え、「人が輝く持続可能な未来の東京」を共に築いてまいりたいと存じます。

最後に、この新しい年の国家の安寧と弥栄、日枝神社の御神徳の昂揚と、御社頭の御隆昌、氏子崇敬会の更なる御発展、また皆様の御健勝と御多幸を心から祈念いたしまして、私の新年の御挨拶とさせていただきます。

令和八年　元日

新春祭典・行事のご案内

一　月

一日（木）
午前零時　若水祭
神能「ひとり翁」奉奏
山階弥右衛門師　奉仕
午前七時　歳旦祭

三日（土）
午前八時　元始祭

四日（日）
午後二時　奉納書初展奉告祭
山王奉書会記念講演は行いません

十三日（火）
午前十一時　印章護持祭

十五日（木）
午前九時　月次祭
午前十時三十分　神符焼納祭

十七日（土）～十八日（日）
神宮初詣旅行会　賢島・東海方面

二十三日（金）
午後六時　新年互礼会

二　月

三日（火）
午前十一時三十分　節分祭追儺神事

特別寄稿

参議院議員
山谷えり子

皇紀二千六百八十六年、令和八年が幕開けとなりました。

謹んで新春のお慶びを申し上げます。新年を迎えるにあたり、御皇室の弥栄と天下泰平、国土安穏、聖寿無窮、万民豊楽を祈念いたします。

丙午（ひのえ・うま）の本年は、太陽のような強い光熱の激しさを力に変え、逆境を乗り越えていく力を授けてくれる年といわれています。

日本では、古くから馬が「神の使い」として神社でまつられてきました。「絵馬」も元々は生きた馬を神様に献上していた風習が時代とともに変化して絵に描いた馬にかわっていったものです。

日枝神社に参拝すると、願い事や感謝の気持ちがしたためられた絵馬がたくさん奉納されているのをみかけます。

前回の丙午にあたる昭和41年には、国立劇場開場やビートルズ来日公演など、わが国の文化芸術の歴史において大きな出来事があった年でした。

日枝神社の御由緒は、かつて江戸城内に山王宮が祀られていましたが、徳川家康公が江戸城に居城されるにあたり、新たに社地を江戸城外に社殿を新築して遷祀された場所が隼町国立劇場付近で、明暦三年まで元山王と呼ばれるその地にありました。

また、ビートルズが日本で滞在したホテルは、日枝神社に隣接するキャピトル東急ホテル（当時は東京ヒルトンホテル）で、現在もホテル内にはビートルズにちなんだ場所がいくつも残されております。

どちらも日枝神社との御縁を感じます。皆様もどうぞ初詣の帰りに歴史散歩をされてはいかがでしょうか。

昨年六月に公開された映画『国宝』は、邦画実写で歴代の興行収入ランキングを二十二年ぶりに塗り替え、日本映画における最高評価を獲得しています。

海外の映画祭でも上映され、来年には北米での一般公開も決定しています。

主演の役者さんはインタビューで、一年半にわたりゼロから歌舞伎の稽古を重ねていく中で、最初の三、四ヶ月はすり足だけの稽古であったこと、本物の歌舞伎役者の域には決して到達できないと悟り、ただただ芸術への献身に集中したと語っていました。

劇中での「間」や「呼吸」など、日本の伝統文化の底流にある共通のものが観客に共鳴し伝わっているだと思います。

実際の歌舞伎も映画『国宝』の好影響をうけ、若者や海外といったこれまでにない層の客足が伸びているそうです。

昨秋に高市総理大臣が誕生し、内閣発足後二ヶ月が過ぎました。

高市政権においては女性と若年層、現役世代の支持率が牽引しているという過去にない結果となっています。

総理就任5日目である10月25日からの外交ウィークを走り抜けました。東南アジア諸国連合（ASEAN）首脳会談から始まり、米国のトランプ大統領の訪日、そして韓国でのアジア太平洋経済協力（APEC）首脳会合と精力的に「世界の真ん中で咲き誇る日本外交を取り戻す」という決意の下、力強い外交・安全保障政策を推進していくというリーダーシップを示してくれました。

私は、自民党の北朝鮮による拉致問題対策本部長をつとめておりますが、トランプ大統領と拉致被害者ご家族が赤坂の迎賓館で面会された日に、拉致問題対策本部を開催し、家族会の皆様よりご報告をいただきました。

「米国はどこまでも、彼らとともにある」と早期解決に向けた日本への支持を改めて表明してくれたことに家族会の皆様も大きな励ましとなったと述べられました。

中学一年生だった横田めぐみさんが拉致されて四十八年が過ぎました。先月の国民大集会で、高市総理は日朝首脳会談を申し入れている旨の発言もあり、大きな潮目がきていると感じます。国際社会が複雑な情勢だからこそ扉を開く可能性があると思っています。

午年の今年は、一気に駆け抜けるように何事にもスピード感をもって邁進していく一年でありたいと願います。結びに国家の安寧と皆様のご多幸を心より祈念し、新年のご挨拶とさせていただきます。

山王祭 —日本三大祭— 異聞

祭礼研究家
水戸一斎
（監修　山瀬一男）

神輿

山王御祭礼の神幸行列には、一之宮から三之宮まで三基の神輿が見られます（**画像1**）。前を進む二基が「鳳輦」で、後ろの一基が「宮神輿」です。

これを聞いたまつり好きの方の中には、「おやっ？」と感じられた方もいらっしゃるかもしれません。御祭礼の神輿は、三基とも屋根に鳳凰が乗っているからです。

一般的に、神輿の上に鳳凰の飾り物さえあれば、たとえそれが町の所有する「町神輿」であっても、すべて鳳輦と呼ばれています。御祭礼の三基はどれも「鳳輦」のはずです。

それでは、神輿と鳳輦の違いは、いったい何なのでしょうか。今回は神輿の起源を探り、神輿や鳳輦の真の姿を解き明かしたいと思います。

【画像1】山王祭神輿

「輿」と「輦」

奈良時代より前から、日本は中国古代王朝の唐から絶大な影響を受けていました。唐のものであれば、制度であれ文化であれ、積極的に取り入れたのです。

唐で天子の乗り物とされた「輿」や「輦」も、日本に受け入れられました。平安時代の日記『中右記』には、「我が朝、帝王・皇后・斎王のほか、輿に乗る人なし」と記されています。斎王とは天皇に代わって伊勢神宮に仕える内親王のことで、輿は天皇または天皇に準じる限られた人の乗り物であったと言えます。

大陸風の洗練された意匠の輿は、四府駕輿丁という朝廷の官人によって運ばれました。清少納言は『枕草子』の中で、輿に乗った天皇を「神々しく、いつくしう、いみじう（神聖で、荘厳で、すばらしい）」と讃えています。

輿と輦は、車輪のあるなしで見分けがつきます。車輪のある方が輦です。もっとも、輦は日本の道路事情に合わなかったため、もっぱら輿が使われました。そのうち輿と輦が混同され、鳳凰の乗った輿も「鳳輦」と呼ばれるようになりました。

八幡宮の神輿

天平勝宝元年（七四九）、九州にある宇佐八幡宮の行列が奈良の東大寺を訪れました。宇佐八幡は東大寺の大仏建立に多大な貢献をし、このときも完成間近の大仏を拝礼するためはるばる九州から訪れたのです。

朝廷は一行を厚くもてなしました。その行列の中心に輿がありました。紫色の錦に覆われたその輿は、天皇が乗る輿と同じ「鳳輦」でした。

輿には宇佐八幡の巫女が乗っていました。巫女は神と人との仲介役でした。八幡神の特色のひとつに「託宣（神のお告げ）」があげられます。八幡神は巫女の口を通じて言葉を発したのです。それゆえ巫女は神と同格とされ、輿に乗るのにふさわしいとみなされたのでしょう。

その後、宇佐八幡は中央政権内の権力闘争に巻き込まれ、朝廷から追いやられてしまいました。やがて復権した宇佐八幡ですが、権力闘争に託宣が悪用された苦い経験から、巫女は託宣にほとんど関わらなくなりました。

宝亀八年（七七七）、宇佐八幡宮ではじめて放生会が行われました。放生会とは命の大切さを学び、生き物を海に放す行事で、養老四年（七二〇）に九州で起きた「隼人の乱」

の戦死者を慰霊する意図もありました。

放生会では、八幡神が儀式に立ち会えるようにするため、輿が仕立てられました。巫女によって御神体が社殿から輿に移され、海辺へと運ばれました。

これが神のための輿、すなわち「神輿」の誕生と考えられています。放生会のはじまりとともに、巫女は社殿の鍵を預かり、御神体を守る唯一の存在となりました（飯沼賢司氏「八幡神と神輿の成立」より）。

志多羅神の神輿

天慶八年（九四五）、三基の輿を伴った民衆が摂津国（現在の大阪府）から京都へ向かっているとの情報が朝廷にもたらされました。

にわか作りの簡素な輿でしたが、そのうちの一基はそれなりに作り込まれ、神社の社殿のような檜皮葺（ひわだぶ）きに、正面には鳥居が設置され、扁額（へんがく）が取り付けられていました。明らかにそれは「神輿」を意識して作られたものでした。

人々は歌い踊りながら京を目指し、神輿が集落の境まで到着すると、隣の集落に引き渡しました。「何の神を祀っているのですか」と聞いても、「志多羅神（しだらがみ）」「小藺笠神（こいがさがみ）」など、人によって答えはさまざまでした。

はじめは数百人ほどの規模でしたが、都へ近づくにつれ人数が増え、最終的に数千万人（！）の大群衆となりました。神輿の数も、いつしか六基まで増えました。

これは当時民間で流行していた「御霊会（ごりょうえ）」そのものと言えます。平安時代になると都市化が進み、疫病が猛威を振るうようになりました。疫神の仕業とされていた疫病ですが、やがて非業の死を遂げた人間、すなわち御霊によるものと考えられるようになり、人々は御霊を歌舞でもてなし、集落の外へ送り出したのです。それが御霊会です。

この時期、さらに強力な災いをもたらす霊が話題となっていました。有能でありながら大宰府へ左遷され、その地で生涯を閉じた菅原道真公の霊です。

道真公の死後、左遷に関わった人たちが次々と謎の死を遂げたことから、公の祟りではないかとささやかれていました。延長八年（九三〇）に清涼殿へ雷が落ち、居合わせた醍醐天皇が三か月後に亡くなると、噂は決定的となりました。「道真公が雷神となって、左遷した張本人である醍醐天皇に天罰を与えた」と人々は信じ、疫神をはるかに超えた雷神の怒りを鎮めるため、天慶八年に御霊会を催したものと思われます。神輿の扁額に、道真公を意味する「自在天神」と書かれていたことが、そのことを裏付けます。

志多羅神というのも、特定の神のことではなく、しだら（手拍子）を打ってもてなすすべての神を指しました。雷神となった道真公の霊をもてなそうと、人々は手拍子をして歌い踊ったのです。

もっとも、神を輿に乗せるという発想は、八幡神からきているようです。京都周辺の人にとって、八幡宮の神輿はすでになじみ深い存在となっていました。貞観元年（八五九）に石清水（いわしみず）八幡宮が都の南に創建され、貞観五年からは放生会も行われていました。御神体を乗せた神輿は、山頂の社殿からふもとまで降りてきて、そこで儀式を行いました。

八幡神は五穀豊穣の神としても有名でした。天慶八年に人々が歌った詞の中に、「月は笠着る、八幡種まく」とあります。民衆は八幡神に親近感を抱いていたのです。最終的に神輿は託宣に導かれ、石清水八幡宮に迎えられましたが、そのころには神輿の扁額は「宇佐宮八幡大菩薩御社」にかけかえられていました。

とはいえ、神社の社殿を模したこの神輿は、形のうえでは八幡宮の神輿とは異なっていたようです。時代が下った鎌倉時代に石清水八幡宮で使われていた神輿が和歌山県の鞆淵（ともぶち）八幡神社に残っていますが（**画像2**）、それを見ると昔ながらの鳳輦形をしています。そうしたことからも、天慶八年に作られた輿は神輿の元祖と言ってよいでしょう。それは鳳輦と違う道を歩みだした「神専用の輿」でした。

強訴の神輿

嘉保二年（一〇九五）、朝廷では延暦寺が日吉（ひえしゃ）社の神輿を押し立てて入洛するのではないかという噂で持ちきりでした。強権的な白河上皇が延暦寺の人事にまで介入したため、両者の衝突は必至の情勢でした。解

【画像2】国宝・沃懸地螺鈿金銅装神輿
（いかけじらでんこんどうそうしんよ）
（鞆淵八幡神社所蔵）

決に向けた交渉は一向に進まず、延暦寺は朝廷側の譲歩を引き出そうと、直接行動に出ることを決意しました。いわゆる「強訴」です。

とはいえ、かつて延暦寺の僧が経巻を携えて示威行動に及んだときは、何も得ることができませんでした。そこで今回は攻め方を変え、神輿の神威を借りて自らの要求を通すことを考えたのです。

武装した延暦寺の僧は、神輿を先頭に賀茂川の対岸まで押し寄せました。対する関白藤原頼通は、神輿を前に少しも臆することなく、「まったく神輿をはばかるべからず」と言い放って矢を射させました。僧たちは逃げまどい、神輿を比叡山の根本中堂まで振り上げ、頼通を呪詛しました。四年後に頼通が三八歳の若さで亡くなると、人々は「日吉の神様の祟りだ」と恐れおののきました。

この事件は当時の人々に強烈な印象を与えたらしく、『平家物語』第一巻「願立」の章にもこの事件が取り上げられています。この章は白河上皇が「賀茂川の水、双六の賽、山法師、これぞわが心にかなわぬもの」と嘆いたという逸話でも有名です。山法師とは延暦寺の僧のことですが、強訴に及んで武器を携えた僧は特に「法師武者」と呼びました。

保安四年（一一二三）、山法師たちは賀茂川を越え、都になだれ込みました。迎え撃つは源平の武士、山法師をさんざんに打ち破りました。山法師たちは神輿をその場に振り捨て、ほうほうの体で退散しました。

ところが、これが思わぬ効果を生みました。残された神輿を人々は恐れ、誰も触ろうとしなかったからです。朝廷は仕方なく、延暦寺に神輿の引き取りを懇願し、それと引き替えに延暦寺の要求を全部受け入れました。以来、強訴において神輿を振り捨てることが山法師の常套手段となりました。

祇園社の神輿

天延二年（九七四）、祇園社（現在の八坂神社）の神輿による洛中の渡御がはじまりました。いわゆる祇園御霊会（現在の祇園祭）です。

これより百年以上前には、朝廷による御霊会が大々的に行われていたのですが、その後は長らく中断されたままとなっていました。この年、延暦寺中興の祖と言われる第一八代天台座主良源が祇園社を支配下に置き、御霊会を再興したのです。多くの人がまつりの見物に訪れ、歌や踊りを楽しみました。

一二世紀後半の作とされる「年中行事絵巻」（原画は江戸時代に消失）に、祇園御霊会の神輿が描かれています（**画像3**）。この絵巻は後白河上皇が御用絵師に描かせたものですが、それに先立つ承安二年（一一七二）に、上皇は祇園社へ三基の神輿を寄進しています。さらに同年、上皇は自ら御霊会の見物もしました。おそらく上皇は、自分が積極的に関与した御霊会を絵巻物に残しておきたかったのでしょう。遊興好きな上皇らしいはからいと言えます。

それでは、描かれた神輿を見てみましょう。その姿はもはや単なる鳳輦形ではなく、鳥居を備え、高欄を巡らし、神の象徴である鏡をかけています。上皇は神社の社殿を念頭に、鳳輦の製作を注文したのでしょう。天慶八年の神輿が、そこには息づいています。

江戸時代の神輿

江戸時代、祇園御霊会の駕輿丁は京またはその周辺にある特定の町の住民が任じていました。彼らにとって名誉なことでしたが、町に住む人が減るにつれ駕輿丁を集めることが難しくなり、人手不足のため神輿の重さに耐えかねて地面へ落とす事故がたびたび起こるようになりました。

元禄期ごろから、手薄な駕輿丁のすきを縫って、頼んでもいない人が横から勝手に入り込むことが増えま

【画像3】年中行事絵巻の神輿（出典：国立国会図書館デジタルコレクション）

した。「願昇（がんかき）」と呼ばれた彼らは、神輿に触れば病気が治り、願いがかなうと信じていたのでした。正規の駕輿丁にとって、彼らははっきり言って邪魔でしたが、そのうち町の人たちは願昇を駕輿丁に取り込み、力を合わせて神輿を持ち上げるようになりました。

幕末の江戸には、「助人足（すけにんそく）」なる者が現われました。

山王御祭礼と並び「天下祭」と称された神田祭は、大伝馬町と南伝馬町の伝馬人足が駕輿丁となっていました。弘化二年（一八四五）、神社へ帰ろうとしていた神輿を助人足が奪い取り、京橋から日本橋にかけてその勢いを著しく増し、身動きが取れないほどの大混雑を引き起こしたのです。挙句の果てに、彼らは神輿を破損させてしまいました。

幕府は大いに怒り、規制を徹底的に強化して助人足を抑え込みました。それによって事件は二度と起こりませんでしたが、これも神輿のご利益を期待するがゆえの振る舞いでした。

【画像4】銀座を渡る御祭礼の鳳輦（新島章夫画）

山王御祭礼の神輿

明治時代になると、祭礼を取り巻く環境は一変しました。江戸幕府の崩壊により、富裕な町人はまつりから自由になり、屋台などに大金をつぎ込むことがなくなりました。東京の町には路面電車が引かれ、架線が網の目のように張り巡らされたので、背の高い山車は動かすことができなくなりました。結果的に、町の人たちの出番が極端に減りました。

にぎやかなまつりが忘れられない町の人たちは、自分たちで神輿を作ることをはじめました。そのうち神輿が町一番の自慢となり、隣町と豪華さを競い合うようになりました。飾り金具などの装飾に磨きがかけられ、明治の終わりごろには、神輿は全盛期を迎えました。

大正六年（一九一七）、日枝神社は官幣大社昇格後はじめての御祭礼を挙行することにしました。氏子総代は神輿の新調を決議し、町神輿との違いが一目でわかるよう、はるか京都まで注文を出しました。できあがった神輿は平安時代さながらの「鳳輦」となりました（宮神輿はその五年後の製作です）。現代の御祭礼に天皇と同じ輿を見ることができるのは、こうした背景があるからです（画像4）。

神輿とは

これまで見てきたように、神輿には一二〇〇年余りの歴史があります。時代や場所によってその使われ方はさまざまですが、神輿に対する畏敬の念はいつの世にも変わることはありません。

強訴の際に振り捨てられた神輿でさえ、都じゅうから多くの人が集まり、頭を下げ、手を合わせたと伝えられています。神を乗せた輿は、宮神輿でも町神輿でも、それが鳳輦形でなかったとしても、日本人の心の拠りどころであり続けるでしょう。

【追記】

本稿を監修していただいた山瀬一男さまが十一月二十日に逝去されました。ご冥福をお祈り致します。

謹みて新年の御祝詞を申し上げます

頌春

令和八丙午歳

日枝神社

代表役員 宮司 宮西修治
責任役員 中澤彦七
同 大澤忠政
同 澤田晴子
同 泉由紀子
同 細田安兵衛
同 吉田淳一
同 魚谷雅彦
責任役員 権宮司 大塚正行

謹賀新年

順不同敬称略

㈱ぬ利彦 取締役会長 中澤彦七 3口

八重洲ライフ㈱ 八重洲ゴルフライフ 代表取締役社長 松本信義 3口

マネックスグループ㈱ 会長 松本大 3口

永田町・霞ヶ関 平河町

山の茶屋 遠藤恒夫

山王熱供給㈱ 代表取締役社長 津曲荒太

ザ・キャピトルホテル東急 総支配人 志村恒治

日枝神社四葉会

㈱アルファビデオ 代表取締役 青山朋孝

山王むらさき会 会長 藤田誠

㈱永田町天竹

麹町・紀尾井町

㈱泉屋東京店 代表取締役 泉由紀子

㈱ニュー・オータニ 代表取締役社長 清水肇

麹町ビルディング㈱ 勝山勝

㈱ジャパングレーライン 代表取締役 眞下慶一郎

㈱ジョー・コーポレーション 代表取締役 堀切健司

弁護士法人一番町綜合法律事務所 代表弁護士 神﨑浩昭

㈲ナリタ美容室 成田弘子

番町・九段・四谷

㈱伊勢半ホールディングス 代表取締役社長 澤田晴子

三番町 田中康博

㈳清水隆商店 代表社員 清水昭治

表千家 不審菴 家元 千宗左

㈱朝日写真ニュース社 代表取締役社長 阪田裕一

㈱千修 代表取締役社長 下谷友康

㈱ナカノフドー建設 代表取締役社長 飯塚隆

㈱ぶんか社 代表取締役 今晴美

大手町・丸の内 内幸町・有楽町

三菱地所㈱ 執行役社長 中島篤 2口

東宝㈱ 代表取締役社長 松岡宏泰

㈱帝国ホテル 代表取締役社長執行役員 風間淳

泉吉㈱ 代表取締役 岸本昌子

㈱東京會舘 代表取締役社長 渡辺訓章

田中貴金属グループ CEO 田中浩一朗

東京技工㈱ 代表取締役社長 林光男

㈱キョウエイアドインターナショナル 代表取締役社長 廣瀬勝巳

頌春

令和八丙午歳

日枝神社

大総代 遠藤恒夫

同 関口弥寿雄

同 根岸進

同 田中康博

同 清水昭治

同 上野良夫

同 松岡宏泰

同 野永喜一郎

同 今野克彦

同 冨田正一

同 三枝亮

同 小坂敬

同 北見芳夫

同 木村暖子

同 羽田宇男

同 亀岡恒方

謹賀新年

順不同敬称略

八重洲・日本橋

日本橋ゆかり 野永喜一郎

㈱榮太樓總本舗 代表取締役社長 細田将己

㈱髙島屋日本橋店 常務取締役店長 牧野考一

東京建物㈱ 代表取締役 社長執行役員 小澤克人

日本橋吉野鮨本店 吉野正敏

川崎定徳㈱ 代表取締役 川崎眞次郎

木村實業㈱ 代表取締役社長 木村平右衛門

中西瀝青ホールディングス㈱ 代表取締役 森口友美子

金子架設工業㈱ 代表取締役社長 青木茂

小宮山印刷㈱ 代表取締役社長 小宮山貴史

八丁堀 茅場町・兜町

北見不動産㈲ 取締役会長 北見芳夫 取締役社長 北見千穂

㈳北見商店 代表社員 北見まさゑ

いちよし証券㈱ 執行役社長 玉田弘文

京橋

㈱大澤ローヤル 代表取締役 大澤忠政

㈱トミタ 会長 冨田正一

清水建設㈱ 取締役社長 新村達也

東京中央青果㈱ 代表取締役社長 藤尾益雄

中島金属箔粉工業㈱ 代表取締役社長 中島裕

銀座

㈱小松ストアー 代表取締役 小坂敬

㈱木村商店 代表取締役 木村暖子

㈱ギンザのサヱグサ 代表取締役社長 三枝亮

㈱小林傳次郎中央地所部 代表取締役社長 小林久子

正金商事㈱ 代表取締役 蛯原宗久

銀座越後屋 八代目 永井甚右衛門

㈱銀座木村家 代表取締役 木村光伯

銀座吉田㈱ 代表取締役 吉田民雄

崇敬者（氏子外）

㈱フェム 代表取締役 藤田誠 2口

facialnorico�同 代表社員 大澤典子

㈱ホッタ 取締役社長 堀田峰明

コトー商事㈱ 野玉善一

きねや足袋㈱ 代表取締役 中澤貴之

㈱錦屋マリエマリエ 代表取締役 勝田久美子

京橋大根河岸会 会長 鈴木敏行

㈱ミロク情報サービス 代表取締役社長 是枝周樹

鈴木徽章工芸㈱ 代表取締役社長 鈴木敬二

㈱アーバネットコーポレーション 代表取締役会長兼CEO 服部信治

㈱糟谷 相談役 糟谷孝男

㈱井筒装束店 代表取締役 佐織鉄郎

㈱髙田装束店 代表取締役 加藤充則

㈱大槻装束店 代表取締役 大槻奈津子

佐竹昭二

頌春

令和八丙午歳

日枝神社

宮司 宮西修治

権宮司 大塚正行

禰宜 髙原聖司

禰宜 鎌田周作

権禰宜 土田幸大

同 片山徹

同 内田博之

同 手塚和記

同 松橋裕晃

同 高野大樹

同 中島大二郎

同 奥津和

同 金鑽和樹

同 セレストハルト

謹賀新年

順不同敬称略

㈱兵左衛門 代表取締役 浦谷剛人
裏千家 今日庵 千宗室
㈱フォーシーズ 代表取締役会長兼CEO 浅野幸子
安全自動車㈱ 代表取締役社長 中谷宗平
㈱丸井スズキ 代表取締役 鈴木貴博
廣田特許事務所 代表 廣田雅紀
有楽商事㈱ 代表取締役 平沼顕司
佐藤産業㈱ 会長 佐藤太美雄
㈱信英堂 代表取締役 桜井俊一
朝日総業㈱ 代表取締役会長 岡本雅之
代表取締役社長 池本なぎさ
㈱CMC 代表取締役 髙橋悦郎

山王むらさき会

㈱アルファビデオ
ヴィライズ㈱
㈱エイチ・アンド・アールプロモーション
㈱大島寅次郎商店
オタギ㈱
㈱ゴトウ花店
㈱昌月堂
日本橋髙島屋
㈲トーシン
㈱フェム
㈱マルビシ

酒は、これを神々に献り、その撤下（おさがり）をいただく事によって、うつうつとした気持ちが晴れやかになる百薬の長です。
当日枝神社の御祭神大山咋神は、古来、酒を司らせ給う東都の酒神と厚く信仰せられるところであります。

令和七年例祭献酒醸造元芳名（順不同・敬称略）

新政酒造㈱
吉乃川㈱東京支店
山梨銘醸㈱
醉仙酒造㈱
太田酒造㈱
谷櫻酒造㈲
秋田銘醸㈱
黄桜㈱
㈱土井酒造場
沢の鶴㈱東京支店
㈱山本本家
㈱醉心山根本店
大関㈱首都圏支社
江井ヶ嶋酒造㈱
㈱今田酒造本店
賀茂鶴酒造㈱
豊島屋酒造㈱
醉鯨酒造㈱
ヤマサ醤油㈱
田村酒造場
土佐鶴酒造㈱
濱田酒造㈱
石川酒造㈱
司牡丹酒造㈱
小西酒造㈱東京支社
福徳長酒類㈱
千代の園酒造㈱
宝酒造㈱
㈱飯沼本家
㈱福光屋
雲海酒造㈱東京支店
鍋店㈱
桝田酒造店
霧島酒造㈱
木戸泉酒造㈱
栃倉酒造㈱
日本盛㈱東京支店
岩瀬酒造㈱
㈱丸山酒造場
ヒガシマル醤油㈱
㈱家久長本店
㈱北雪酒造
櫻正宗㈱東京支店
天鷹酒造㈱
奥の松酒造㈱
菊正宗酒造㈱
㈱小山本家酒造
㈱佐浦
白鶴酒造㈱東京支社
㈱矢尾本店酒つくりの森
和田酒造合資会社
月桂冠㈱
㈱柴崎酒造
㈱六歌仙
薩摩酒造㈱
㈱七笑酒造
㈱土田酒造

頌春

令和八丙午歳

日枝神社氏子崇敬会
会長 小池百合子
副会長 中澤彦七
同 大澤忠政
同 澤田晴子
同 泉由紀子
同 細田安兵衛
同 吉田淳一
同 魚谷雅彦
顧問 樋口高顕
同 山本泰人
同 清家愛
同 長谷川眞理子
監事 遠藤恒夫
同 南村員哉

令和七年　回顧

一月
元旦　若水祭
歳旦祭
國學院大學佐柳正三理事長参拝
二日　小池百合子氏子崇敬会長参拝
三日　元始祭
五日　第六十一回奉納書初展感謝奉告祭
十三日　印章護持祭
十五日　神符焼納祭
十八日～　初詣旅行
十九日　神社本庁田中総長　吉川副総長
二十二日　小野、藤江常務理事参拝
二十三日　神社本庁鷹司統理参拝
新年互礼会
二十七日　文化財防火デー消防演習

二月
二日　節分祭
十一日　紀元祭
十七日　祈年祭
二十三日　天長祭

新年御礼会

参集殿竣工祭

神符焼納祭

三月
十九日　第十四回責任役員会
第十四回神社大総代会
氏子崇敬会評議員会
二十日　春季皇霊祭遥拝

四月
十九日　山王稲荷神社例祭
二十九日　昭和祭

五月
四日　御神田田植祭　於　千葉県香取市
七日　参集殿竣工祭

六月
二日　第十五回責任役員会
第十五回神社大総代会
責任役員　大総代　合同会
七日～　山王まつり
十七日　八坂神社例祭
七日　奉納剣道大会奉告祭

八日　境内茶園 並 狭山新茶奉納奉告祭
　　稚児行列
十日　表千家献茶式
十三日　摂社祭
〜
十五日　献灯祭
　　山王音頭と民踊大会
十五日　例祭
十六日　山王嘉祥祭
十七日　裏千家家元献茶式
三十日　大祓 並 鎮火祭

八月
四日　箸感謝祭
八日　南回廊他新築工事地鎮祭
三十一日　御神田抜穂祭 於 千葉県香取市

九月
四日　星岡会（旧職員会）
二十三日　秋季皇霊祭遥拝
　　山王祖霊祭

節分祭

例祭

十月
六日　第五十五回中秋管弦祭
十七日　神嘗祭遥拝
二十四日　第二十二回武蔵野御陵清掃奉仕
三十日　第十六回責任役員会
　　第十六回神社大総代会
　　責任役員・大総代合同会

十一月
三日　明治祭
二十三日　新嘗祭

十二月
一日　大麻神札頒布始奉告祭
十九日　責任役員大総代関係団体代表等合同納会
三十一日　大祓 並 鎮火祭
　　除夜祭

寄稿

江戸時代の長寿祝い

武蔵大学教授　福原敏男

平安から江戸時代には、還暦などの個別行事の総称は「賀寿」「算賀」「年祝」「賀の祝」などといわれた。

たとえば、平均寿命の短かった平安時代の貴族社会の長寿祝いは四十歳から始まり十年ごとに行われたが、次第にすたれていった。

十年ごとの祝いは古希のみが残り、公家や武家社会の還暦・喜寿・米寿の祝いが「室町時代頃から行なわれ始めた」とされる（「算賀」『日本国語大辞典』第二版、小学館）。

江戸時代には儒教精神のもと、高齢者は威厳を保って敬われたが、庶民の長寿祝いは川柳の「賀の餅を腰も強と誉てくひ」（『誹風柳多留』四九13）のように、餅で祝ったようである。

一方、出島の出入絵師川原慶賀は十九世紀に、長崎町人の長寿祝いを描いている。オランダのライデン国立民族学博物館蔵「人の一生」の**図1・2**は、子や孫などが裕福らしき老夫婦に挨拶して祝っている。

さて、江戸幕府がキリシタン禁制と住民管理を目的として檀那寺に作成させた「宗門人別改帳」には、誕生日は記されておらず、誕生日がどれほど記憶（認識）・記録されていたものか定かではない。

年齢を「数え年」で計算していた当時、長寿祝いは加齢する正月に行われていたという説がある（小澤弘執筆、NHKデータ情報部編一九九一『ヴィジュアル百科江戸事情〈第1巻〉生活編』雄山閣）。

一方、『斎藤月岑日記』弘化二年（一八四五）七月十日条によると、江戸の町名主月岑は知人の御家人水野市郎父の古希祝いに招かれている。月岑は金百疋（現貨幣価値の二～三万円に相当）と「麤酒糲肴」を持参し、自らの進物の酒肴について恐縮している。その粗末な「糲肴」とは、盆の時季に保存の効く塩鯖による**図3**の「生（いき）みたま」ではなかろうか。

中世以来、盂蘭盆時季の長寿祝いとして生みたまと称する行事が行われ、「みたま」には「御霊」や「御魂」、また身、見や玉があてられてきた。

生みたまは両親や師匠、親方など、本来は高齢者の霊魂をさしたが、行事名や進物名になっていった。

中国道教の中元が日本へ伝来して盆の祖霊祭と習合すると、七月十五日は一年の下半期の起点とされるようになった。また同日の少し前に、日本独自の「中元の祝」として生みたまが生まれ、第二次世界大戦前まで盛んに行われた。

生みたまは「両親に、病など苦悩の患いが一切なく、百年の寿命を保つことを願う」との一節がある「盂蘭盆経」に基づくものとされる。家族に一年間不幸がなく、両親健在の家でな

図1　川原慶賀筆の長寿祝い図（ライデン国立民族学博物館蔵「人の一生」所収）

図2　川原慶賀筆の長寿祝い図（ライデン国立民族学博物館蔵「人の一生」所収）

されることが多く、他所に暮らす子や孫も帰省して両親を敬い祝って馳走や進物をしてきた。

大家では血縁のない人も招き、参加者の進物が贈答習俗「お中元」の源流とされる。

さて、加賀藩士白沢其方は六十代半ばの安永三年（一七七四）七月に、「中元の御祝」と題して**図3**の生みたまを描いている（石川県立歴史博物館蔵「流聞軒其方狂歌絵日記」）。

生みたまには生臭物の馳走や進物により長寿の活力が願われた。仏教で禁じられる盆の期間の魚食により、祖霊に近づいた高齢者の生みたまを活気づけて、生者側に引き戻そうとする考えが背景にある。**図3**も、蓮の葉に包まれた蓮飯と刺鯖であり、前者は鯖を背開きにして塩干しし、一尾のエラの間にもう一尾の頭を差し入れて、二尾重ねて「一刺」とする。

一方、後者はもち米を蓮の葉に包んで蒸し、蓮の香りを移した強飯である。

妻も健在な其方は「いつ見ても大豆て身玉の影白し　夫婦中よき刺鯖の形（ナリ）」との狂歌を詠み、二尾が寄り添うような刺鯖一刺の姿に、夫婦の仲睦まじさを喩えたのであろう。

絵と狂歌は、子や孫と同居する高齢の其方夫妻が彼らから贈られた生みたまを描いた。それはおそらく当時老齢とされた五十代以降に贈られ続け、「いつ見ても」同様の生みたまと詠んだものであろう。

前述した斎藤月岑が招かれた七月十日の古希祝いは、例年の生みたまを特別に盛大にした祝いと考えられる。一般的な還暦や古希などの祝いも、生みたまに行われたものと思われる。

江戸時代の還暦や古希などの記録が乏しいのは、生みたまに包含されたからであろう。

図3　金沢の加賀藩士家の生身玉（流聞軒其方狂歌絵日記）

さて、現代の生みたまは九月十五日の「敬老の日」の頃、俳句に詠まれる秋の季語となっている（旧暦七月の秋に対して、新暦九月は生みたまにふさわしい）。

たとえば令和七年九月二十一日の朝日新聞「朝日俳壇」に「生身魂」が三句に用いられ、うち一句が「一言に二言返す生身魂」（塩野谷慎吾作）である。

年若い者に祝われたかつての受動的な「生みたま」は長寿社会の現在、高齢者の力強い存在をアピールする言葉に変わったのである。

【謝辞】
亀川泰照・滝口正哉両氏には『斎藤月岑日記』について御教示を賜りました。深く感謝致します。

南回廊地鎮祭

令和七年八月八日に南回廊の地鎮祭を執り行いました。

竣工は令和八年四月を予定しております。

御神米づくり 抜穂祭

令和七年八月三十一日（日）に抜穂祭を執り行いました。晴天に恵まれ、祭典の後に参加者全員で豊かに稔った稲を刈り取りました。収穫したお米は新嘗祭の神饌としてお供えしました。

令和八年年回り

日枝神社は江戸城の裏鬼門を守る神社として崇敬された事から、方除の信仰をあつめています。

令和八年の八方塞がりは

昭和二年・昭和十一年・昭和二十年
昭和二十九年・昭和三十八年・昭和四十七年
昭和五十六年・平成二年・平成十一年
平成二十年・平成二十九年・令和八年

一白水星

令和八年の凶星は

大正十三年・昭和八年・昭和十七年
昭和二十六年・昭和三十五年・昭和四十四年
昭和五十三年・昭和六十二年・平成八年
平成十七年・平成二十六年・令和五年

四緑木星

大正十一年・昭和六年・昭和十五年
昭和二十四年・昭和三十三年・昭和四十二年
昭和五十一年・昭和六十年・平成六年
平成十五年・平成二十四年・令和三年

六白金星

大正十年・昭和五年・昭和十四年
昭和二十三年・昭和三十二年・昭和四十一年
昭和五十年・昭和五十九年・平成五年
平成十四年・平成二十三年・令和二年

七赤金星

以上の生まれの方々です。

日枝神社家庭暦上梓

令和八丙午年
日枝神社家庭暦

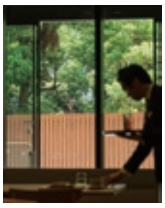
境内授与所にて頒布してます。
初穂料 五百円。

山王茶寮

日枝神社参集殿地下一階にカフェレストラン「山王茶寮」がオープンしました。

「湯葉と蟹のあんかけ丼」「海老天婦羅蕎麦」等の和食・「とろとろオムライス ハヤシソース」「鮑と野菜のカレー」等の洋食を始め「モンブランケーキ」「白玉クリームあんみつ」といった甘未も揃えています。

各種御宴席も承っていますのでご参拝の折にお立ち寄りください。



〈通巻 百四十七号〉
発行 令和八年一月一日
編集 日枝神社社務所
東京都千代田区永田町二丁目十番五号
（郵便番号 一〇〇―〇〇一四）
TEL ○三―三五八一―二四七一（代表）
FAX ○三―三五八一―二〇七七
http://www.hiejinja.net/

©わたせせいぞう

令和８年厄年表（数え年）

男の厄年

前　厄	本　厄	後　厄
平成15年生 **24歳** ひつじ	平成14年生 **25歳** うま	平成13年生 **26歳** み（へび）
昭和61年生 **41歳** とら	昭和60年生 **42歳** うし	昭和59年生 **43歳** ね（ねずみ）
昭和42年生 **60歳** ひつじ	昭和41年生 **61歳** うま	昭和40年生 **62歳** み（へび）

女の厄年

前　厄	本　厄	後　厄
平成21年生 **18歳** うし	平成20年生 **19歳** ね（ねずみ）	平成19年生 **20歳** ゐ（いのしし）
平成７年生 **32歳** ゐ（いのしし）	平成６年生 **33歳** いぬ	平成５年生 **34歳** とり
平成３年生 **36歳** ひつじ	平成２年生 **37歳** うま	平成元年生 昭和64年生 **38歳** み（へび）

東京都千代田区永田町２丁目10番５号
TEL.　03-3502-2205
FAX.　03-3502-8948
http://www.hieakasaka.net/

日枝神社
結婚式場
日枝（ひえ）あかさか